

クリストフ・シュテルツル
『カフカの邪悪なベーメン
—あるプラハ・ユダヤ人の社会史のために—』(3)

伊 藤 勉 訳

第3章 1883年から1924年までの反ユダヤ主義時代におけるユダヤ人
中産階級(承前)

装身具商ヘルマン・カフカはこのリストには載っていなかった。彼は自分の家族をチェコ系と申告していたが、その際、秘密漏洩に似た、ちょっとしたミスを犯している。例えば、カフカの母親は1890年の国勢調査では、日常使用する言語としてチェコ語を申告している。しかし、名前の表記は明らかにドイツ系の〈ユーリエ・カフカ〉となっている。1900年の調査では、彼女は中立を装って姓の方を記入していない。1910年になると、明らかに周囲のチェコ社会に合わせた〈ユーリエ・カフコーヴァ〉と記入している⁽⁸¹⁾。しかし、民族的に不利を被る可能性を除去したところで、それはユダヤ人の営む商売の将来性を保証してはくれなかった。世紀転換期以降、カフカ家は商売不振に、いやそれどころか「装身具卸業の著しい退潮」(カフカ『フリーチェへの手紙』)に見舞われていた。工業界に進出しようとしたカフカ家の企ての背景にあったのは、こうしたますます顕著となってゆく商売不振だったのかもしれない。それとも、この〈プラハ最初のアスベスト工場〉——その創立にはカフカも参加した——は、オーストリア資本主義の上層部に最終的に地歩を占め、商工会議所や工業連盟に加入できる身分にまで上昇しようとする、ヘルマン・カフカの最後の試みだったのだろうか? 確かに、この社会的身分にまで到達すれば、そこには反社会主義という共通の関心以外には、他のいかなるイデオロギーも存在しないという理由からしても、反ユダヤ主義を恐れる必要はなかったのだ

から。これは考えられることだろう。というのは、反ユダヤ主義の仕掛けの物質的な罠から実際に逃れえたのは、大ブルジョアのユダヤ人たちに限られていたのだから。例えば、文学史に膾炙した幾つかの例を挙げてみれば、ヴェルフェル家、グラープ家、ブロッホ家、ツヴァイク家、クラウス家といったところである。彼らは経済的に極めて裕福であり、キリスト教の洗礼を受けることさえ行なわれたが、「これはプラハのユダヤ人仲間では、ユダヤ人が到達できる最高の社会的段階であると見做されていた」⁽⁸²⁾。これはマックス・ブロートからの引用であり、ここにはシオニスト的なイロニーが込められている。しかし、その背後にある現象そのものは、決して笑ってすまされる問題ではない。事実、キリスト教への受洗は、世俗化したユダヤ人社会を脱け出して、世俗化したキリスト教社会に加入することを意味したし（「彼らがキリスト教的には生きていなかったように、我々もユダヤ的には暮していなかった」⁽⁸³⁾）、従ってまた、それは決して思想的な行為ではなく、ひとつの社会的行動だった。しかしこの社会的行動は、個人が遂に十分な強さを持つに至った結果——この強さはほとんどの場合、資本蓄積によって到達された物質的な強さだったが——、強制的に課されていた忌わしい特殊な運命から自らを解放し、やっと市民社会の、何ら特別な徴を帯びぬ一構成員となりえたことを意味していた。むろんヴィーンと違ってここベーメンでは、受洗やユダヤ人社会からの脱出は、不買運動や精神的テロを武器として行なわれた、この冷酷な市民戦争の時代にあっては、ごく稀にしか起こらなかったが。

自由な経済活動を行なうための地盤は時を経るにつれて脆弱化していったが、それよりも更に危険だったのは、勢いを増した反ユダヤ主義が、ユダヤ人知識人層に対して仕掛けてくる妨害工作であった。経済恐慌以降、ドイツ人、チェコ人、ユダヤ人を問わず、上昇志向を抱く人々の主な関心は、もはや自由な経済活動の分野で地位を確立することではなく、大学や役所で「より安全な」職業に就くことに向けられた。息子カフカが〈装身具卸商〉を継がないと決めた時、（その理由については後に考察しよう）ヘルマンは「ユダヤ人中産階級に通例の息子の取り扱い方」（カフカ『父への手紙』）に従って、息子を大学に入れた。しかしカフカが専攻した法学は、ユダヤ人が、嫌われながらもそれまでは一応は享受していた、役人として

昇進するチャンスをもはや保証してはくれなかった。「ユダヤ人が官吏になるのが困難になったわけではない。ただ、周囲はユダヤ人が昇進するのを喜ばなかった。一定の地位に就こうとしたら、ユダヤ人はキリスト教徒の官吏の二倍の業績を挙げねばならぬ、というのが原則だった⁽⁸⁴⁾」。ユダヤ人に対する法的規制を実施するまでもなく、これが通り相場だった。ユダヤ人は「決して議員にはなれないし、オーストリア帝国領の多くでは、裁判官や財務官にもなれない」⁽⁸⁵⁾とプラハでは言われていた。マックス・ブロートは、「ユダヤ人の場合には、特別に有力な縁故がなければ就くことのできない国家公務員の職」⁽⁸⁶⁾のことを羨ましそうに語っている。従って、ヘルマン・カフカが息子の「役にも立たぬ友情」をこきおろしたのは、むしろ当然のことといえよう。半官半民の機関や地方公共団体においても、それどころか自由な経済活動の分野でも、見通しは明かるくなかった。カフカと共に職を探していたブロートは、「適切なポストを手に入れようとする期待が、しばしば裏切られる⁽⁸⁷⁾」ことを嘆いている。カフカが遂に労働者災害保険局に就職できたのは幸運のおかげだった。1917年、カフカは、ユダヤ人の就職に際して援助を求めてきたブロートに宛てて、こう書いている。「この保険局はユダヤ人には近付けない。(……) 現在ここにいる二人のユダヤ人が、どうやってここにもぐり込めたか不可解だし、こんなことはもう二度と繰り返されない」(『書簡集』)。1907年、カフカは「10月までに僕の見通しが少しも良くなならないなら、商業専門学校の高卒講座に通って」スペイン語を学び、法学博士の称号を持つ彼が、資格の点で自分を有利にしたいと考える。1909年の時点でみると、プラハの総人口中9%がユダヤ人であり、プラハの租税収入の20%はユダヤ人が納めているにも拘わらず、プラハ全市の3000人の公務員中、ユダヤ人の数は23人にすぎない⁽⁸⁸⁾。チェコ系の貯蓄銀行や銀行は更に厳しい姿勢を示していた。「プラハやブリュンの本店でも、帝国全土に散在する支店でも、原則としてユダヤ人は採用されない。ユダヤ人求職者が採用されようとして、いかにチェコ人らしく振舞おうとも!」⁽⁸⁹⁾。こうした状況の下では、プラハ・チェコ大学の受講者のうち、ユダヤ人は僅か1.1%しかいなかったのも何ら不思議ではないわけだ⁽⁹⁰⁾。カフカも所属していた〈ユダヤ人公務員協会〉は1910年、次のように訴えている。「アーリア系企業の大半は、非ユダヤ

人しか受け入れない。(……) 加えて、ユダヤ人公務員を組織の中の邪魔物として扱う非ユダヤ人の敵意も見うけられる」⁽⁹¹⁾。カフカのあるテキストには、同じ事態が次のように記されている。「役所であまり働きすぎて、疲労のあまり休暇をうまく楽しむこともできない。しかし、こうした働きによって、他の人々から愛情をこめて取り扱ってもらえる資格ができると思ったら間違いで、むしろ、至る所で疎外され、孤独になり、せいぜい好奇心の対象になるだけなのだ」(カフカ『田舎の婚礼準備』)。自由業、特に弁護士と医者になるというユダヤ人の古典的な活路は、この分野へのユダヤ人の大量進出のために破綻し始めていた。1890年、ヴィーンでは681人の弁護士中、394人がユダヤ人であり、弁護士志願者360人中の310名をユダヤ人が占めていた⁽⁹²⁾。1910年代を通して、新聞の求人広告でも、キリスト教の受洗証明書が要求されることがますます頻繁となった⁽⁹³⁾。1911年、汎ドイツ主義者たちは、ユダヤ人排斥を図る法的規制を提案した。彼らは、議会、裁判官、将校、公的教育機関での教育職からのユダヤ人の排除、公証人、弁護士へのユダヤ人の就職制限を要求し、更には、抜け道を塞ぐために、姓名変更の禁止と厳密なユダヤ人統計の作成をも要求した⁽⁹⁴⁾。知的分野でのこうした市民戦争の背景をなしていたのは、ドイツ人とチェコ人が、知的な職業の分野で互いに苛烈な競争を強いられていたことであった。大学卒業者数と自由業のポストの数との間には著しい不均衡があった。つまり、民族間の競争のおかげで、教育機関は飛躍的に拡充されたにも拘わらず、オーストリア経済が停滞し続けていたために、自由業に就ける者の数は一向に増えなかったのである。法学部卒業生の間での就職をめぐる争いは、既に1897年におけるバデーニ危機の社会的背景となっていた。なぜなら、バデーニの言語令によって、チェコ人が官吏に就くのが有利となったからである^{訳注(一)}。チェコ人が有利になったからといって「チェコ人は、たとえそうしたいと思っても、獲得した成果に満足することはできない」のは当然であった。「というのは、民族的な大問題がパンと胃袋の問題となったからである」⁽⁹⁵⁾。毎年、プラハ・チェコ大学は1000人の卒業生を送り出したが、限られたチェコの国家機関では彼らを十分に吸収することはできなかった。ユダヤ人大学生の比率は、ユダヤ人が総人口中に占める割合と比べると著しく高かったが、彼らの卒業後の見通しは

極めて暗かった。1904年から1905年にかけての時期、ベーメンの全人口中に占めるユダヤ人の比率は1.46%だったが、プラハ・ドイツ大学の学生中に占めるユダヤ人学生の割合は24.9%に達しており、これに対してチェコ人学生の割合は1%であった。プラハのドイツ工科大学ではユダヤ人学生が19.8%を占め、チェコ人学生は1.2%である。更に、オーストリアの総人口中、ユダヤ人の割合は4.69%だが、ウィーン大学の学生の約50%はユダヤ人学生だった⁽⁹⁶⁾。それゆえ、ユダヤ人の「入学制限」をめぐる議論は1900年以降、特にドイツ人の人種主義者とキリスト教社会主義者の間では流行のテーマであった。1901年、カフカが大学に入学した年、ドイツ系ベーメンの反ユダヤ主義者たちは、彼らの中傷が明らかに経済的動機に基づくものであることを、偽善的にもまだ認めていなかった。

「ユダヤ人の勤勉さが長所だというのなら、我々にとっては欠点だらけのドイツ人学生のほうが好ましい。ドイツ人学生の、若さゆえの軽率さ、居酒屋での乱痴気騒ぎ、名誉、祖国、自由、民族といった〈抽象観念〉に対する彼らのロマンティックな熱中——むろん彼らはこうした事柄に入れあげても、有利な教授職に就くことはできないだろうが、それでもユダヤ人学生よりもはるかにましだ。ユダヤ的な傲慢さや物質的欲望、それにユダヤ人学生の無知と浅薄さについては、ビルロート (Theodor Billroth. 1829—1894. 1867年以降ウィーン大学医学部教授。胃の切除、咽喉手術など数々のパイオニア的業績をもつウィーン外科医学の大家。ブラームスやハンスリックとの交友も厚かった文化人だったが、医学部内での言動は反ユダヤ主義的だった——訳者注) が既に、ウィーン大学での教育に関する彼の著名な書物で模範的に叙述している。こうした類のユダヤ人学生たちは、ユダヤ民族特有の手練手管を弄してあらゆる試験を切り抜け、遂にはドクターにまで出世する。しかしドイツ人学生は、自分と同じ講義に出ているユダヤ人学生を、たとえこの年齢にして既に、将来の職業上の競争相手と見做すほど物質的に墮落していたとしても、ドイツ学生がこうしたユダヤ人学生を恐れたり、憎んだりすることはないだろう。むろん、もっと分別のあるドイツ人学生たちは、すべての大学で蔓延しつつあるユダヤ化に直面して、現在すでにユダヤ人学生たちの傍若無人の商魂に対して憂慮の

念を抱いている。彼ら未来の医者、弁護士、専門家や三百代言たちは、ひたすら商魂たくましく、学生らしい気前の良さや学問的良心を欠いているおかげで、ドイツ人学生を凌駕しているからである。しかしながら、政治や営利活動についてまだ何ひとつ知らないドイツ人学生に見られる反ユダヤ主義の真の原因は、あらゆる知的な職業分野がユダヤ人に占拠されることに対する不安に由来するのではなく、ドイツ人とは異質な、徹底して物質的利益を追求するユダヤ精神に対する、ドイツの青年のまさに本能的といえる民族的反発から来るのである。ドイツの青年は、ユダヤ人の〈同級生〉の一人一人に、こうしたユダヤ精神が、ある場合には顕著に、ある場合には目立たぬ形で刻印されているのに気付かざるをえないのである」⁽⁹⁷⁾

数年後にはもはやいかなる韜晦も不要となった。1908 年、キリスト教社会主義者、ドイツ民族主義者、それにチェコの地主たちはオーストリア議会に対して、「キリスト教徒の中学生の数とユダヤ人中学生の数の割合を、両者の実際の人口比と一致させるよう、政府は統計的調査を実施せよ」という動議を提出した⁽⁹⁸⁾。ユダヤ人の高等教育機関への進出に対する最初の攻撃は、社会民主党の介入によって辛うじて阻止された。自由党は拱手傍観していた。

ヴィーン議会の状況は、ベーメンの状況を正確に反映していた。1900 年以降の国家的危機が進行した時期には、ベーメン・ユダヤ人のほぼ完全な孤立が露呈された。彼らは陰に陽に、あらゆる政治団体から脱退するよう迫られ、個人生活の領域に完全に撤退するよう求められた。1901 年のベーメン州議会は、州議会史上はじめて、一人のユダヤ人議員をも選出しなかった。「まるでこれでは、ベーメンのユダヤ系住民が——彼らの祖税負担率を少く見積ってもらっては困る——議事から完全に排除されたも同然だし(……)，ユダヤ人の大工場主や法律家たちが、洋服仕立屋や手袋職人よりも価値がないといわんばかりだ」⁽⁹⁹⁾。1907 年、オーストリア自由党は、ユダヤ人議員の自主的脱退を代償にしてようやくドイツ・市民政連盟に受け入れられた。そして 1910 年、ドイツ自由主義は終焉を迎える。自由主義者の残党はドイツ民族議会連合に吸収された⁽¹⁰⁰⁾。ほとんどのメンバーが

ユダヤ系のプラハ支部だけが、古き良き自由主義の唯一の化石然として生き残り、引き続き分担金の支払いに応ずることによって、民族議会連合と緩やかな連携を保っていた。このプラハ支部の指導者は、フランツ・カフカの従兄ブルノ・カフカであり、彼はキリスト教に改宗し、婚姻によってベーメン最大の工業家一族の一員となっていた。ドイツ系ベーメンでは、退潮した自由主義に代って民族主義が、「静かに、礼儀正しく」進出してきた⁽¹⁰¹⁾。彼らは自分たちの勢力を確立するのに、もはや騒々しい反ユダヤ運動に訴える必要はなかった。彼らの勢力は日常生活の中でも、極めて具体的な形で発揮された。例えば 1912 年、ベーメンのライパでは、「ユダヤ人と非ユダヤ人の社会的関係は冷えきっていた」⁽¹⁰²⁾ し、エガーでは既に世紀転換期頃にカフェの入口に、「チェコ人、ユダヤ人、犬はお断り」と記された看板が掲げられていた⁽¹⁰³⁾。

チェコの政党事情に眼を向けてみると、街頭テロが続いた時代に青年チェコ党が退潮し、それに代って、1897 年から 99 年にかけて頭角を現わしていた、更にいっそう過激な新勢力が台頭してきた。クロファチは、彼の下に集った民族社会主義の信奉者たちを率いて青年チェコ党から脱退した。かくて鎖に繋がれていた猛犬は解き放たれ、大衆新聞を創刊し、ロシアのツァーによる支配体制（彼らはちょうどこの頃、新しいポグロム政策に着手していた）と渡りをつけ、資金の流入を図った。チェコ民族社会主義の支持基盤となったのは、零落した小市民階級、下級公務員、新たに発生した、不満を抱くサラリーマン層、知識人失業者、労働組合に組織されている労働者階級の一部などだった。従来から「過激な」地域であるプラハの場末で、この党は勢力を伸ばした。この地区には比較的ましな下層階級が住んでおり、チェコ民族主義の台頭以来、彼らは自分たちの社会的劣等感を、政治に目覚めた攻撃的な民族への帰属感によって補償しようとしたのである⁽¹⁰⁴⁾。カフカはある時、こうした社会状況について次のように記した。

「我々が住んでいるこの場末の家は、中世の廃墟を利用して建てられた賃貸アパートだ。(……) 町の生活から煮出される悲慘が寄り集っているこの家には、確実に 100 人以上の人々が住んでいる」。続けてカフカはあ

るひとつの住居を描写する。「その仕立屋は、自分と妻と6人の子供が住むのに、たった一部屋しか借りておらず、しかもその唯一の部屋は台所としても使われる。おまけに彼は、ある税務所の書記を間借人として置いている。我々のアパート全体が既に充分ひどいものだが、それにしてもこの部屋の過密ぶりは、アパートの水準を更に上回っている。(……) 皆はその男をお役人と呼んでいるが、きっと下っ端の書記にすぎないのだろう。見ず知らずの夫婦とその6人の子供の家庭の真中には入り込み、床に敷いた藁布団の上で寝ているくらいだから。」(カフカ『ハツ折り判ノート』より)

ユダヤ人にとっては極めて不運なことに、ヴィーンのキリスト教社会党と並んでチェコの民族社会主義者たちもまた、民族政党の相貌を露骨に示し始めた。1909年の時点では、クロファチの党は間違いなく「事実上の民族代表⁽¹⁰⁵⁾」であった。更に弁護士カレル・バクサも〈急進法律家党〉を結成した。この党は、次第にブルジョア化してゆく青年チェコ党の微温的な愛国主義ではもはや飽き足りなくなった選挙者層を惹きつけた。1911年、民族社会主義者と青年チェコ党の間の選挙協定の結果、ベーメン全土で最もユダヤ人選挙人の多い選挙区であるプラハ旧市街が、よりによってカレル・バクサに割り当てられた⁽¹⁰⁶⁾。

ユダヤ人の皇帝崇拜は、1849年3月、18歳の若きフランツ・ヨーゼフ帝が最初のユダヤ人解放を定めて以来、広く行き渡っていたが(カフカもまた誕生に際して、ハプスブルク家にちなむ名前「フランツ」を付けられたのではなかったか?), それは1910年代に頂点に達した。カフカの父ヘルマンだけでなく、この世代に属する人すべての特徴といえる、「帝室顧問官」、つまりオーストリア帝国の支配階級高官の知遇を得たいという願望は、カフカの伝記研究の中では単なる滑稽な成り上り者根性で見做されてきたが、こうした現象も以上のような皇帝崇拜の風潮との関連で考察すべきであろう。(ある別のベーメン・ユダヤ人の息子は、自分の父について次のように記している、「父は帝国のあらゆる有力者に対して、父の知性からするとおよそ信じ難いほどの崇敬の念を抱いていた。父の崇敬心は官僚機構の末端部にまで及び、更には聖職者や財界の有力者にも及んでいた⁽¹⁰⁷⁾」)。そ

して事実、ある時ベーメン・ユダヤ人のところに皇帝の慰めの言葉が届いた。エゴン・エルヴィン・キッシュ (Egon Erwin Kisch 1885 — 1948, プラハ旧市街に生まれ、カフカとは友人だった。左翼的立場ルポルタージュ作家として名声を確立、スペイン人民戦線に参加、ニューヨークに亡命、メキシコを経て二次大戦後プラハに戻る。『韋駄天記者』1925。——訳者注) の伯父、従軍ラビのアレクサンダー・キッシュが1899年12月、皇帝に拝謁した折、皇帝が発した言葉をユダヤ人のところに届けたのである。

「謁見の席で私は、現在ベーメンでユダヤ人が辛い目にあわされていることを仄めかした。皇帝陛下がそれに応じられて〈そうだ、お前たちユダヤ人は現在辛い日々を送っている、しかしこれでも以前よりは良くなったのだ〉とおっしゃられた時、私はとっさに勇気を奮い起こして、〈はい陛下、私たちは辛い日々を送っております〉と述べて、他ならぬ現在が問題であることを強調した。すると陛下は、あるいは私の眼に浮かぶ涙を心に留められたせいかもしれないが、力をこめて〈私はあのような蛮行にとっても腹を立てている〉という、あの歴史的に有名になった御言葉を述べられたのだ」⁽¹⁰⁸⁾

このような〈皇帝の御言葉〉はどの程度利き目があったのだろうか？ 国家が現実を示した態度を考え合わせてみると、この言葉はいかなる意味を持っていたのか？ 皇帝がいかに不偏不党の公正の守護者であったとしても、皇帝は遠くに、遥か彼方に御座しておられ、近くにいたのはベーメン総督であった。複雑に入り組んだ司法・行政機構の中で、ユダヤ人にとって有利な道筋を見つけ出すことは、既にそれほど容易なことではなくなっていた。1900年以降、反自由主義勢力は下級官吏層の全体にわたって、組織的に浸透していた。チェコ人の場合は、こうした下層階級が国粋主義の最も熱心な担い手であり、ベーメン・ドイツ人の場合は、教師、町村役場吏員、税務官などが大衆的組織〈ベーメン・ドイツ人同盟〉を結成し、その傘下に無数の店員組織、サラリーマン組織、体操家団体を糾合して国政に影響力を持つ圧力団体となっていた。彼らを糾合するにあたっての共通イデオロギーは〈人種統一戦線〉を結成することが必要だという意識で

あった。末端組織の多くは、その規約に〈アーリア人条項〉を掲げていたが、国家はそれを阻むことができなかった⁽¹⁰⁹⁾。

オーストリアの反自由主義に関するムジールの簡潔な分析を借用して言えば、それは「とぎれとぎれに降っていた驟雨がひとつにまとまり、間断なく降り続く本格的な雨に変わっていった」時代であった⁽¹¹⁰⁾。こうした時勢に対して、ヘルマン・カフカのように怒りを爆発させる人間もいた。「例えば、あなたはチェコ人を罵倒し、それからドイツ人を、更にはユダヤ人を罵倒しました。しかも、個々の点を取りあげるだけでなく、全面的に罵倒するのです。こうして最後には、批難されずに残るのはあなた自身だけでした」(カフカ『父への手紙』)。あるいは、世紀転換期のプラハ・ドイツ文学がそうしたように、虚構の文学世界に浸りきることもできた。政治的にも社会的にも死んだふりをし、冬眠を決めこむ手もあった。(不買運動と中傷に対抗する法的保護を提供する役目にあった) 自衛組織〈オーストリア・イスラエル同盟〉の1903年の年次報告は、次のように進言している。目下のところユダヤ人は、「我々の内部混乱のカオスから自然必然的に、真に自由主義的な性格を持った新しい政党集団が形成されるまで、冷静に待ち続ける以外には為す術がない。こうした新しい政党形成の時期がいつ訪れるかについては、今のところまだほとんど予測できないが……⁽¹¹¹⁾」。カフカの『観察』には、こうした退嬰的な気分を表現した一節がある。「それゆえ、最上の策は、すべてを受け入れること、重い塊のように振舞うこと、それでも吹き飛ばされそうに感じるなら、決して不必要な一步を踏み出すような誘惑には乗らないことだ」。あるいは、いまだ小さな芽とはいえ、未来を切り拓く可能性に希望を託す方向も存在した。例えばそのひとつがマサリクの現実主義者党であり、組織されたチェコ系ユダヤ人はほとんど例外なくこの党に加わっていた。あるいは、1914年以前の数年間にはじめて顕在化した、プラハのドイツ系ユダヤ人とチェコ文化の接触も、この方向に属する動きといえよう。こうして新しいユダヤ・ベーマン主義が誕生した。この立場は、そのルーツを辿れば、19世紀を遥かに遡ることができる。つまりユダヤ・ベーマン主義は、同化したユダヤ人知識人の第一世代がベーマン居住権を獲得した1840年代における、ユダヤ人の郷土愛に由来しているのである。俗流民族主義者たちは、チェコ人は「少しばかりドイ

ツ的」で、ドイツ人は「少しばかりベーメン的」だと言って批難したが、こうした混交的要素に対するユダヤ人の才能は、チェコ前衛芸術がプラハのドイツ系ユダヤ人との接触を求めた時、文化生活のごく限られた分野においてではあるが、実を結び始めた。それというのも、チェコ前衛芸術は、牢固たる愛国主義者の田舎臭い鈍重さには背を向けて、プラハのドイツ系ユダヤ人のコスモポリタニズムとヨーロッパ的な文化水準に期待したからである。むろん、新しいベーメン主義に立つ知識人たち、ヴェルフェル、コルンフェルト、フックス、ピックたちが、チェコ左翼の前衛芸術サークルから、いつにない好感をもって迎えられた時、彼らがそれに基づいてチェコ民族全体の感情が変化したと考えたのは早計であった。両者の対話を促進させる運動の最も熱心な唱道者の一人であったマックス・ブロートでさえ、1918年になってもなお、ユダヤ人問題に対するチェコ人の「思い上った無知と安直な侮蔑」⁽¹¹²⁾ を批判している。ひとつの光明といえたのは、クロファチの民族社会主義が危険な競争相手としてますます勢力を伸ばしてきた時でもなお、チェコ社会民主党が反ユダヤ的潮流を利用することを一貫して自制していたことであった。1912年末、国会において議長のボフミール・シュメラールは次のように言明した。

「反ユダヤ主義は、それがどのような形態のものであれ (……), 我々にとっては反動と同じものである。自由の擁護という一般的な立場に基づいてそう言えるだけでなく、経済的な見地からしてもそうなのだ。反ユダヤ主義は、現在の資本主義社会の中で、生存を脅かされ、抑圧されている人々の思考を、誤った方向へ逸らせてしまう。その結果、経済的に困窮し、反ユダヤ主義に幻惑された人々は、自分たちの置かれている状況の真の原因が把握できなくなる。彼らは組織的な階級闘争に立ち上ることができず、〈ユダヤ人搾取者〉といった個別的現象を攻撃目標にするのだ⁽¹¹³⁾」

むろん、社会民主党の政治的力量はまだそれほど大きくはなかった。1907年、遂にオーストリアに普通選挙法が導入された。社会民主党は政権獲得が目前に迫ったと考えた。しかし、社会主義オーストリアへの期待は

虚妄にすぎないことが明らかになった。「赤の危険」に対する不安から、市民階級は急速に歩み寄った。即ち、意外にもキリスト教社会党が中心的な政党へと躍進し、諸民族の調和を図る超民族的政府の中軸的政党となる可能性が生まれたのである。

「キリスト教社会党は、結婚・家庭生活の神聖、及び若者の倫理的・宗教的教育の神聖として顕現しているところのキリスト教的・ドイツ的美徳を、ドイツ民族の最も高貴な財産と考えている。わが党は、健全な国民生活を支えるこの基盤を、ユダヤ的・フリーメイソンの精神に牛耳られた社会民主党やその追随者たちの凶暴な攻撃から、敢然と守りきるであろう。ユダヤ民族とユダヤ新聞の支援を受けてわが党に敵対する諸政党に抗して、キリスト教社会党は、真の社会的・経済的進歩を目指すこの綱領を、不屈の忍耐をもって掲げる。わが党は、自覚せるキリスト教国民の行動力を堅く信じている⁽¹¹⁵⁾」

1907年の選挙声明には以上のように記されている。20年来、ルエーガー党（キリスト教社会党）がヴィーンで巧みに実践していた選挙を通しての独裁支配——それは〈ヴィーンのユダヤ化〉に対する際限のない言論攻撃を伴っていた——がこれ以降、通常の支配形態となるのだろうか？ この試みは中絶した。なぜなら、まず第一に、1910年のルエーガーの死によって、カリスマ的素質を持つ個性的指導者がいなくなったからである。（オーストリアは「東方辺境地方への入植民が、自らの戦列から生み出した最後の偉大なドイツ人」を喪った、と葬儀に参列したアドルフ・ヒトラーは述べた⁽¹¹⁶⁾）。更に今ひとつの理由としては、民族主義的諸政党は、自らの作り出した常套句の霧の中にいまだ囚われていたために、彼らのイデオロギーを変化した政治情勢に適用するのに、まだ暫く時間を要した、という点が考えられる。かくて、1907年から1914年にかけてのオーストリア政治はさまざまな可能性を孕んでおり、最終的に権力を握るのは誰なのかは容易に予測がつかなかった。

この頃のカフカの「政治的傾向」はどのようなものだったのか？ 僅かに残されている情況証拠から推測する限り、カフカはこうした混沌とした政

情の中をさまよい歩く、注意深く好奇心に富む一介の放浪者だったようだ。彼は、ドイツ人とチェコ人の少数の反国粹主義者の拠点であるヴィー
 ンの『時代』誌を読み（マサリクはこの雑誌の協力者の一人だった）、この
 雑誌の主催した懸賞募集に応募している。彼はまた政治集会を訪れ、青年
 チェコ党の党首クラマーシュやチェコの社会民主主義者ズクプ、それにク
 ロファチの講演まで聴いている。カフカは学友のイロヴィと旧交を暖め、
 チェコのアナーキスト、ミハル・マレシュと親交を結び、アナーキストの
 集会に出席し、チェコの労働組合サークルに顔を出し、マサリクの現実主
 義者党の演説を聴き、彼らの主張を載せている『時代』を読んでいる⁽¹¹⁷⁾。
 しかし、カフカの政治的傾向を形作る際に決定的な契機となったものは、
 市民生活が暗黒化してゆく時代に（小さなサークルの中で）開花したベー
 メン・シオニズムに彼が関与したことである。ユダヤ民族主義に共鳴する
 特別な内的条件が存在したとは断言できないが、外的な条件は少なからず
 整っていた。即ち、カフカの交際仲間の中には、級友フーゴー・ベルクマ
 ン、ヴェルチの従兄たち、ジクムント・カツネルソン、そしてマック
 ス・ブロートといったこの新しい運動の最も有力な担い手が何人も含まれ
 ていた。1907 年来、プラハではシオニズムの立場に立つ『自衛』紙が出て
 いたが、カフカはその最も熱心な読者の一人となった⁽¹¹⁸⁾。『自衛』は、同化
 したユダヤ人に向かって、ドイツ民族やチェコ民族からは根底的に離脱し
 て、中立的立場を守るよう呼びかけた。そして中立を守る代りに、ユダヤ
 人を「ベーメン第三の民族」として国家が承認すること、そして——権力
 の制限、比例代表制、バランスのとれた公務員の配置基準とその調整はひ
 とまず措いても——少数民族の生存権を保証する立法措置を構ずるよう要
 求した。『自衛』紙が最も鋭く批判したのは、同化ユダヤ人ブルジョア階級
 の、反ユダヤ的な時代潮流への恥知らずな——彼らはそう決めつける——
 迎合ぶりであった。というのは、ユダヤ人企業は、無節操にも、反ユダヤ
 新聞にも平然として自社の広告を載せていたし、ユダヤ人商店はクロファ
 チの率いる党に献金することによって彼らの指弾を免れようとしたし、ユ
 ダヤ人経営者の多くは、時代に即したイメージ戦略として、無節操にもキ
 リスト教の受洗証明書を手に入しようとしたからである。「ユダヤ系企業が
 往々にしてアーリア人のふりをしたがかり、職を求めてくるユダヤ人を受け

入れないという苦情がしばしば聞かれる。こうした行為は、同化ユダヤ人の抱く反ユダヤ主義の発露に他ならない。他民族への屈従がこうした利敵行為を生むのである」⁽¹¹⁹⁾。また、ロスチャイルド家やグットマン家といった〈ユダヤ系〉大企業が、ルエーガー記念碑の建立に際して多額の寄付を行ったのも無節操であるし、学生組合所属のドイツかぶれのユダヤ人学生たちが、プラハの町をデモ行進しながら、チェコ民族主義者を排発したのも無節操な振舞いだった。その結果、1908年12月、プラハに再び戒厳令が布かれることにもなった。しかし恐らくこうした無節操ぶりは決して無性格に帰因するものではなく、あのオーストリア独特の現実感覚がよりいっそう発達したものに過ぎないのである。厳格な批判者たちはこうした現実感覚を「適当にお茶を濁すやり方」として批難した。しかしこの感覚は、当面は解決しそうにない社会集団間の軋轢が、将来いつか解決されるのを実践的に先取りしているとも考えられる。少なくともムジールは、「当然ながら、ヨーロッパの耳目をそばだたせたあの民族闘争」を後に検討した時、このように考えたのである。

「民族間の闘争はまことに熾烈を極め、そのために年に何度も国家機能が麻痺し、停止してしまうのだった。しかしそれ以外の期間、及び国家機能の停止中にも、人々は極く上気嫌に暮しており、まるで何事もなかったかのように振舞った。事実、現実には何も起こらなかったのである。ただこの国では既に早くから、自分以外のあらゆる他人の営為に対する各人の反感が、こういってよければ、一種の精妙な儀式へと造りあげられており、この儀式は、ある破局によってその発展が時至る前に中断されなかったならば、偉大な成果を生むことができたかもしれない⁽¹²¹⁾」

ともあれ、ユダヤ人の度し難い楽天主たちは(〈自民族の店で〉運動を経済的に耐え通したのはこうした人々だった)、「良質で安価な品物を買いたい人は、クロファチやバクサの眼が怖いからといって、質が悪くて高い品物を選ぶことはないだろう⁽¹²²⁾」と考えていた。リベラルな政治家たちもまた、こうした「安ずるより産むが安し」式の楽天主義に陥って、汎ドイツ

主義との政治的対決を回避しがちだった。「反ユダヤ主義の主唱者たちは、確かにユダヤ人を誹謗しているが、しかし彼らがユダヤ人の店で買物をしたり、ユダヤ人弁護士や医師に援助を求めたりする場合には、ユダヤ人の長所を認めているのだから、その点からすると反ユダヤ主義は、むしろ理論上のものに過ぎない⁽¹²³⁾」といった認識レベルに彼らは止まっていた。しかし『自衛』紙のシオニズムは、事態を正反対に把握しており、徹底したペシミズムに囚われたあまり、オーストリアにおける一種のユダヤ人流の〈自民族の店で〉運動にまで突き進んだ。

ドイツ人とチェコ人の和協 (Ausgleich) を図る試み——これは第1次世界大戦の前夜 (1912 年) に繰り返し試みられ、その度に失敗した——に対しては、シオニストたちは不信の念を抱いていた^{訳注(二)}。それというのも、この両民族の構成員にすべてのポストを平等に分配するという場合、ユダヤ人の生活圏がどうなるのかという問題は全く無視されていたからである。いずれにせよ、1908 年、オーストリア議会でのドイツ急進党の党首ペルゲルトの「ドイツ人はユダヤ人による支援を断念する！我々はユダヤ人をチェコ人に贈る！⁽¹²⁴⁾」という提案からは、何ら良い見通しは窺えなかった。ドイツ人側の政策は、ドイツ・チェコの両民族が国土を最終的に二分割し、おのこの自分の言葉を話すまとまった二つの勢力圏を造りあげるべきだ、という方向性をいよいよ鮮明に打ち出し始めた。こうなると、「ほとんど専らユダヤ人から成る」プラハ・ドイツ地区が、民族的和協という有利な取引の儀性になる恐れが多分にあった。しかしまた同年、マサリクの協力者ヤン・ヘルベンまでが「本当のことを言えば、チェコ人の大多数は反ユダヤ主義者である」と語っている⁽¹²⁵⁾。更には、オーストリア皇位継承者フランツ・フェルディナントへの期待も絡んでいた。プラハ南方、ベネシャウ近郊のコノピシェット城に暮らすこのオーストリア皇太子は、老皇帝の死と帝国改造の機が到来するのを、いらいらしながら待ちうけていた。この将来の統治者の反ユダヤ主義的傾向ははっきりしていた。彼は既に、非社会主義的な大衆政党に彼の政府の支持基盤を求めるつもりでいた。即ち、ウィーンにおいては、1914 年春の選挙で勝利を収めたキリスト教社会党に、そしてベーメンにおいては、今後その反ハプスブルクの姿勢を改めさせる必要はあったが、チェコ民族社会主義者に支援を仰ぐつもり

でいた⁽¹²⁶⁾。この頃、つまり1913年から14年にかけて、ウィーンの議会において、民族社会主義党幹部カレル・シュヴィーハがオーストリア皇太子に雇われていたことが暴露されるという政治的スキャンダルが、ベーメン政界を揺がす事件も起った。シュヴィーハは党首クロファチを庇い、クロファチは無傷でこのスキャンダルを乗り切った⁽¹²⁷⁾。(いくつかの徴候からみて、チェコ人たちによってシュヴィーハの市民的・民族の実存が破壊されたこのセンセーショナルな道徳的裁判の一部が、カフカの長編『訴訟』の素材になったと考えられる)⁽¹²⁸⁾。

孤立、墮落、裏切り。こうした状況にあった時、サライエヴォで放たれた銃声は、まるで解放の合図のように響き渡った。戦争はオーストリアに対するユダヤ人の愛国心をかきたてた。「オーストリア・ハンガリー帝国のユダヤ人は、軍事教育の持つ重要な意義を認識している。(……)最高指令官が招集命令を下しさえすれば、ユダヤ人兵士は喜んで馳せ参ずるだろう⁽¹²⁹⁾」と1911年に『オーストリア・ハンガリー帝国軍所属ユダヤ人将校履歴便覧』は正しくも予言していた。最も活発な反応を示したのはドイツ系ユダヤ人たちであった。ドイツ系ユダヤ人大ブルジョア階級は、第一次世界大戦勃発に先立つ数年間を支配した時代の精神的潮流の影響を受けていた。彼らのサロンでは、帝国主義的「現実政治」の資本・産業政策がしきりに議論されていたし、力と果斷さが称賛され、大衆化された形のダーウィン主義とニーチェ主義がもてはやされていた。ユダヤ人ヨーゼフ・レートリッヒ——彼もキリスト教に改宗していた——はブルーノ・カフカの党友であり、彼自身は決して好戦的ではなく、メーレンの賢明な工場主であり、後にはオーストリア自由主義の代表的人物になった人だが、その彼でさえ1914年の夏には、暴力こそ歴史の産婆役だと語り、電話で大戦勃発の知らせを聞くと、「万歳!」と歓声を挙げたという⁽¹³⁰⁾。カフカの若い頃の友人で、ドイツ民族主義的な傾向のあったオスカー・ポラックは、大戦勃発後ただちに志願兵として出征し、1915年に戦死している。しかし、「万歳」と叫んだ点では、オーストリア社会民主党幹部のユダヤ人たちも同じだった。1914年の夏の間、社会民主党機関紙『労働者新聞』の論調は、ドイツ民族主義系の諸紙とほとんど異なるところはなかった。1916年、オーストリア社会民主党の、ドイツ民族主義的な立場に近い長老エンゲルベル

ト・ペルナーシュトルファーは感激して次のように述べた。ドイツ系ユダヤ人たちは「今時の戦争において、我々の期待に応じて勇敢に我らの戦列に加わってくれた。彼らはそれまで経験してきた度重なる苦難にも拘わらず、そうしたのである。彼らの胸中には、祖国ドイツを愛する本物の、聖なる炎が燃えているのだ。このたびの彼らの行動は、将来にわたって銘記さるべきであろう⁽¹³¹⁾」。

チェコ系ユダヤ人の反応はもっと穏やかで、多岐にわたり、矛盾したものだった。彼らは最初のうちは、彼らの悩みの種である政治的立場の曖昧さが、オーストリアが一丸となって決起する機運の中で、調和的に解消されることに期待していた。それゆえ、愛国的な大衆デモも行なわれた。カフカの日記にはこうしたデモに対する批判が記されているが、彼はそこでベーメン・ユダヤ人の不安定さを衝いている。

「愛国行進。市長の演説。デモ隊は通り過ぎ、そして再び現われてドイツ語で叫ぶ、〈われらが愛する皇帝陛下、万歳!〉。僕は怒った眼をしてその場に立っている。こうした行進は戦争の最も不愉快な付随現象だ。こうした行進は、ある時はドイツ人、ある時はチェコ人を称するユダヤ商人たちがやっているのだ。彼らがそう自称するのは、確かに是認されている。しかし今はじめて彼らはそれを声高に叫んでもよい機会を得たというわけだ」(カフカ『日記』)

これは父の生き方を描写したとも言えるのではなかろうか？ もう一人の人物、つまりマサリクの右腕であり『時代』の編集長であったヤン・ヘルベンも愛国デモの情景を次のように観察していた。

「先頭に一群のユダヤ人青年、中間部にはシュプレヒコールを指示する若干の中年男たち、そして最後に数名の中年ユダヤ人。行列の先頭を行く二人の若者は、互いに縫い合わせた黒黄旗と白赤旗(ドイツ帝国旗とオーストリア帝国旗——訳者注)を掲げ、このシンボルがいっそう目立つようにしている。この旗のうしろからは、手をつないだ二人の若者が行進してゆく。見たところそれは、チェコ系ユダヤ人とドイツ系ユダヤ人だ。わ

が社の編集部の前を通りかかった時、彼らは〈我が祖国はいずこに〉
(チェコ国歌——著者注)を歌った。彼らはチェコの歌とドイツの歌を交互に歌っているようだった。オーストリアの諸民族の中で、最も好戦的なこの民族を見た時、私は息も止まる思いだった⁽¹³²⁾」

しかし間もなく、チェコ人とユダヤ人の関係は悪化した。1914年夏、チェコ人たちは、自分たちが間もなくロシアの偉大な同胞たちによって解放されるかもしれないという期待を抱いたが、チェコ人のこうしたロシアびいきは、チェコに同化をとげたユダヤ人たちの間にも不信の念をかきたてた。様々な立場のユダヤ人がロシアの勝利を恐れたが、それには充分な理由があった。即ち、ユダヤ人たちにとってみれば、このツァーの支配する国は、内政の手段として平気でポグロムを利用する国であり、ユダヤ人特別法とゲットーを残している国であった。ブランダイスの『ユダヤ年鑑』には次のように述べられている、「われわれユダヤ人にとっては、西欧文化だけが生きる力を与えてくれる酸素である。(……)われわれが恵みを受けたのは、ほんの束の間だけのことだった。しかも今や、19世紀の諸改革によって播かれた種子が、ロシアの暴徒たちによって踏みにじられようとしている」⁽¹³³⁾。戦争勃発の際、カフカは自らの裡に「卑少さ、不決断、戦う者に対する嫉妬と憎悪」を感じ、戦う者たちに対して熱心に「あらゆる災厄が降りかかること」を願ったのだが、その彼も1914年秋の日記には、「オーストリア敗北の悲しみ」と「将来の不安」を記している。

シオニストの大半は、内心では戦争を肯定していた。彼らは政治的判断とは別の次元で、つまり、ユダヤ人の不安を克服する実存的チャンスとして、個人的な自己確証の試みとして戦争を受け入れた。従ってまた、彼らはオーストリア・ハンガリー軍で最も勇敢な兵士となった。一次大戦勃発の遙か以前に、ヘルツルは日記に次のような注目すべき言葉を記していた。「次の戦争が起った時に、我々がまだ(パレスチナに)移住していないとすると、まともなユダヤ人はすべて出征せざるをえないだろう。(……)そして、ユダヤ人たちが互いに敵対する陣営にいれば、お互いに射ち合うだろう。ある者はこの機会にそれまでの借りを張消しにしたいと思うし、またある者はこの機会にひと働きして、将来の名誉を受ける足がかりにし

ようとするのだ。いずれにせよ、ユダヤ人は戦わざるをえないのだろう⁽¹³⁴⁾。ベーメンの指導的シオニスト、フーゴー・ツッカーマンは、人気を博した軍歌「オーストリア騎兵の歌」を作詩し、帝国のために戦死した。『自衛』紙のシオニストたちは彼のために追悼の辞を載せ、この勇敢なユダヤ民族主義者を、ドイツ民族主義のすぐ傍に押しやっている。

「余人ならぬ、自覚的なユダヤ人であるツッカーマンが、最良のドイツ軍歌の作詩者となりえたのはなぜか？ ツッカーマンがドイツ民族の魂の奥底をかくも見事に表現しえたのはなぜか？ それを可能にしたのは彼の性格の無類の卒直さであり、自民族に対する徹底した誠実さなのだ。それゆえに彼はドイツ人を理解していたし、彼はユダヤ人でありながらドイツの偉大さを讃えることができた。そしてドイツ人たちもまた彼を理解したのだ⁽¹³⁵⁾」

1916年4月、シオニズムを掲げる『自衛』紙が、読者に対してオーストリア戦時公債の引き受けを熱心に呼びかけ、その際あわせて「我々にユダヤ人にとって極めて重大な意味を持つ戦争の、偉大な目標に無条件に献身すること⁽¹³⁶⁾」を説いた。(カフカもこの呼びかけに応じている)。1914年夏、マサリクが国を去り、帝国に対して公然と反旗を翻したことは、ベーメン・ユダヤ人すべてに激しい衝撃を与えた。なぜなら、多民族帝国はオーストリア・ユダヤ人にとっては、何といても本能的に必要と感じられていた生活圏であったし、マサリクは、単に彼がボルナ事件で見せた態度のためだけでなく、1914年まで彼が主張していた親オーストリア的改革案のゆえに、ユダヤ人の共感を集めていたからである。二人の著名なベーメン・ユダヤ人、つまりM・ブローとF・ヴェルフェルが、亡命の途につく直前のマサリクを訪れ、彼の国際的な発言力と南スラブ人に対する彼の密接な関係を利用して、すみやかに妥協の平和を達成させるよう必死に説得したのも当然であろう。しかしこの会談は不調のうちに終わった。マサリクは窓の外を指差し、チェコの平和主義者たちを絞首台に送っているプラハ・ユダヤ人たちを批判したのだ。マサリクの率いる現実主義者党の内部でも、ユダヤ人黨員たちに対して疑惑の眼が注がれた。彼らの態度は

「単に親チェコの」であるにすぎず、偉大なこの時代が要求しているように「スラブ的」でないといつて批判されたのである。チェコの後方地域での厭戦気分を警察が取り締り始めるにつれて、ユダヤ人のイメージに新たな翳りが付け加えられた。即ち、ユダヤ人はみな密告者だ、というのである。これがプラハでの支配的な意見だった。チェコ人によるユダヤ人不信論があまりにも猖獗を極めていたために、知的エリート集団だったマサリクの現実主義者党でさえ、1918年の春には、ユダヤ人黨員を実際上は党から除名した⁽¹³⁷⁾。

ドイツ人側でのユダヤ人政策は極めて曖昧だった。1915年、西ベーメンの著名な汎ドイツ主義者イロは、極く曖昧な調子でユダヤ人の将来について、次のように語った。

「新しいドイツ系オーストリア政治の構築のために、すべてのドイツ勢力を糾合することが切に求められている現在、人種問題ではあっても決して国家的・政治的問題ではないところのユダヤ人問題に立ち入るのは、道を誤ることになる。ユダヤ人問題を解決することはドイツ人全体の課題である。このことが根底から、新たに試みられねばならぬことは確かである。ユダヤ人を、ただその素姓の故をもって無条件に排除するのは、この先長く続けられるものではない。この場合にもまた一定の和協 (Ausgleich) が行なわれねばならない。この和協の眼目となるのは、何よりもまずユダヤ人を国家に組み入れること、即ち、ドイツ民族全体の民族的目的に沿うようにユダヤ人を教育し利用することである。ユダヤ人を国家の異分子と見做すのは現在ではもはや通用しない。この点では、戦争も事態を変化させる契機となった。戦場で我々の側に立って戦ったユダヤ人を、この先も十把ひとからげに、国家の寄生虫などと呼ぶことはできない。彼らは我々の仲間になる権利を闘い取ったのだ、ただし国家との関係において。というのは、経済的及び人種的問題を解決するのはこのこととは全く無関係だからである。誰がこうした問題を解決することになるのだろうか？ 現在、わがドイツ系オーストリアの政治的独立を求めて努力が続けられている今の段階では、我々はこうした大問題に関わるわけにはいかないのだ⁽¹³⁸⁾」

この大問題は当分の間先送りにされたとしても、この問題がいかなる道德的視野の下に取り上げられることになるかは予想できた。1918年、M・ブロートは『ボヘミア』紙上に、あるドイツ民族主義的な声明が載った際、戦争目的として挙げられている幾つかの点を分析し、そこに「自民族の利益の巧妙な擁護」が、普遍的な道德律に適うものとして、公然と宣言されていることを指摘した。「もし彼らが自民族の利益やその〈巧妙な擁護〉を、普遍妥当的な最高法則と見做し、それ以上のいかなる審級をも認めないならば、そして、あらゆる政治的な矛盾や不正を、せいぜい僅かな瑕瑾程度にしか考えないならば、我々は彼らを嫌惡するしかない。こうした嫌惡感で現在の我々は窒息しそうだ⁽¹³⁹⁾」

1916年11月、皇帝が世を去った時、これに衝撃をうけたのは、単にフランツ・ヨーゼフ帝の存在を永久に続く堅固な安全保障と考えていた父の世代に属するユダヤ人ブルジョア階級だけではなく。『自衛』紙周辺の若いユダヤ民族主義者たちもまた、ユダヤ民族に「常に慈愛の眼差しを向けていた悲運の君主・善良な支配者⁽¹⁴⁰⁾」の死を悼んだ。人々は皇帝の死を、ひとつの時代の終焉の象徴と受け止めた。飢餓、戦争の惨禍、戦争に乗じての暴利、闇商売などに対する社会の憤満の吐け口として、ユダヤ人が利用される徴候が至る所で顕著となってきた。シオニストたちは、「次の戦争」がまだこれから起ることを予感していた。即ち、戦争の終結と同時に、あらゆる民族による、狂暴な大衆的反ユダヤ主義が横行し始めるだろうことが予想された。こうした事態の発生を防ぐために、ベーメンのシオニストたちは——その中心にはカフカの友人M・ブロートがいた——、戦争末期以降、チェコの政治家たちと協議を始めていた⁽¹⁴¹⁾。しかし、この交渉によって一定の成果、あるいは何らかの安全保障が得られたとしても、それは結局、社会全体の空気を変えるまでには至らなかった。1918年8月、『自衛』紙は次のような声明を発表した。

「プラハの状態は耐え難いものになっている。我々は憎惡によってびっしりと周囲を取り囲まれており、民族的惡意のこうした不快な表現に出会うことなしには、一歩たりとも道を歩けないというのが現状である。

我々ユダヤ民族主義者は、一民族の民族解放闘争には充分の理解を持っている。そのような我々の立場からすれば、高邁な民族的・文化的目標が追求される一方で、かくも低劣な事態が跳梁するがままに任されているのを目撃せねばならぬのはまことに遺憾である。(……) チェコの指導者たちに対して、我々はこの敵対行為を止めさせるよう要求する。(……) 現在のプラハは耐え難い」⁽¹⁴²⁾

これはフランツ・カフカがベーメンのドイツ地区のチューラウにある妹オトラの農場にしばしば滞在し、戦争が終わったら年金を受給しながらジャガイモ作りをしようかと考えていた時期にあたる。時代は切迫していた。近代ベーメン史においてはユダヤ人問題は社会問題と密接に絡み合っていることを知っている人々にとって、暴嵐襲来の予兆は歴然としていた。1918年の初頭以来、物資供給の悪化のために、ストライキや労働者の暴動が頻発していた。デモ行為が禁止されていたにも拘わらず、プラハの場末では略奪が行なわれた⁽¹⁴³⁾。しかし同じ頃、プラハのドイツ系ユダヤ人大ブルジョア階級は、従来と同じ排発的な大ドイツ主義的な姿勢を取り続けていた。1918年3月の時点でもなお、ブルーノ・カフカは、宮廷歌劇場がチェコ人レオ・ヤナーチェクの『イエヌーハ』を上演したというので、ヴィーンに対して激しく抗議した。彼は帝国の「ドイツ的性格」が脅かされていると感じたのだ。

プラハの街角からハプスブルク家の威光が消えた1918年10月(亡命中のマサリクが指導するパリの「チェコスロヴァキア国民会議」は10月19日、正式にチェコスロヴァキアの独立を宣言、10月28日にはプラハの「チェコ国民委員会」も独立を宣言——訳者注)、あるユダヤ人が悲観のあまり「これからは誰が我々を守ってくれるのだ?」と叫んだという⁽¹⁴⁵⁾。ユダヤ人たちは切実に保護を必要としていた。民族独立の喜びに湧き立ち、自制心を失っていたチェコ人の間に、反ユダヤ主義のうねりが再び高まってきた。新国家の建設者となったマサリクがアメリカから、「ユダヤ人は、わが新国家の他の市民と同等の権利を与えられる」というユダヤ人問題に関する宣言を発したにも拘わらず、チェコの反ユダヤ主義の潮流を食い止めることはできなかった。大統領に就任したマサリクが1918年12月、国民に向けての彼の最初の演説で、ユ

ダヤ人憎悪を止めるよう警告しようとしたが、この試みはチェコの諸政党の反対にあって失敗した。繰り返し持ち出される〈ユダヤ人＝密告者〉伝説と並んで、ユダヤ人は戦争を利用して暴利をむさぼったという批難が盛んに宣伝された。特にこの宣伝は、大きな勢力を持つ農民政党が、自分たちの戦時利得の罪を他に転嫁しようとして案出した手であった。反ユダヤ主義のうねりがいかに高かったかは、カフカの将来の義弟、即ちオトラの婚約者ヨーゼフ・ダヴィト（彼はチェコ人でキリスト教徒だった——訳者注）さえもこの風潮に染まったことから推察できよう。1918年10月、オトラはダヴィトに宛てて、次のような悲しい手紙を書いている、「ユダヤ人たちは——もしかしたらほんの一部の人かもしれませんが、あるいはかなりの人がそうなのかもしれませんが——、確かに現在、やってはならないことをやっています。でも、すべてのユダヤ人がそうだということはできません。そのことはあなたも御存知ではありませんか。しかし私は、あなたが私だけを例外扱いなさることは望みません。そのような手段によっては、私の心が安まることはないのです」⁽¹⁴⁷⁾。飢餓暴動や略奪は専らユダヤ人商店を標的にした。カフカの伯父フィリップが店を構えていたコリーンでは、1919年5月、千人余りの群衆がユダヤ人商店を襲った⁽¹⁴⁸⁾。プラハでは都市排外主義の気運が高まり、1848年以来くりかえし宣言されてきた、ドイツ系ユダヤ人の影響から都市を「浄化する」試みが実行に移された。1918年12月1日、ドイツ人通行人に対する最初の暴行が加えられ、その際、「〈ユダヤ人を縛り首にしろ!〉と何度も大声で叫ばれた」⁽¹⁴⁹⁾。ユダヤ人通行人は、たとえ彼らがドイツ語を解さない場合でも、彼らのユダヤ人としての外貌のゆえに暴行を加えられた。（「……ユダヤ人の姿形をしていることが既に排発行為にあたる、というあるチェコ人将校の発言が確認されている」⁽¹⁵⁰⁾）。

かくてまたぞろ、ユダヤ人特別法とユダヤ人の財産没収を要求する世論が流行し始め、「我々の生命をアジアのペストから浄化する」ことを要求する政治的暗雲がたれこめ始めた。シオニストたちは既に、「憎悪という陰の政府」が活動を開始したことに気付いていた。1919年3月、ユダヤ人とみられる通行人がプラハ旧市街で殴られ、9月にはプラハ・ユダヤ人は街頭や公園、電車や酒場の中で悪罵や暴行に曝された⁽¹⁵¹⁾。そして遂にユダヤ人

たちは、新生チェコ共和国で尖鋭化しつつあった階級闘争の集中砲火を二重に浴びる破目に陥った。即ち、1920年12月、ブルジョア政府はほぼ100万人の労働者による政治ストに軍隊を差し向けた。新しい共産党は、反ユダヤ主義の風潮を社会革命のための格好の刺激剤と考え、皮肉な笑みを浮かべてこれを歓迎した。共産党機関紙『赤い権利』は1920年秋、次のように書いている。「ポグロムが起こるなら、それを徹底的に遂行するがよい。そしてユダヤ人資本家たちから、彼らの全財産を没収するのだ。しかし我々は、あくまでそれを富裕者を全廃するための第一段階としてのみ考えている。(……) 事態が共感をもって迎えられするためには、まず富裕なユダヤ人たちから手を着ければいいのだ」⁽¹⁵²⁾。他方、ブルジョア新聞は、この時期、中部ヨーロッパ全域に流布していた、ユダヤ人を世界共産主義運動の黒幕として中傷するヒステリックな合唱に唱和し、それに対する報復としてポグロムをちらつかせながらユダヤ人を脅迫した。例えば、1920年9月には次のような記事がみられる。

「わが共和国にはポグロムに熱をあげる者など一人もいない。誰一人としてユダヤ人に危害を加えてはいない。(……) しかし、ユダヤ人諸君が、この自由を社会秩序破壊のために濫用するならば、わが国民はそれを黙って見逃しはしないということを諸君は覚悟しておかねばならない。我々はこれを最後としてユダヤ人諸君に警告する、外国にいる諸君の同胞の真似をするな、ボルシェヴィズムの先頭に立つな、と。こうした警告を無視するなら、諸君は諸君の運命を自らの手で招き寄せることになる」⁽¹⁵³⁾

更に10月、農民政党系の『ベンコフ』(「土地」)紙には次のような記事が載った。

「もし外国にいるユダヤ人たちによって、我々がほんの僅かでも損害を被ったとしたら、チェコ民族はすべてのユダヤ人・半ユダヤ人指導者を(……)文字通り粉々に踏み潰すであろう。そして共和国全土に、かつて前例のなかったような大規模なポグロムが発生するであろう。我々は地

方に呼びかける、最後の一人に至るまでその時に備えておけ、と」⁽¹⁵⁴⁾

1920年11月、数カ月来の騒擾は遂にプラハの激しい反ユダヤ暴動となって爆発した。1920年11月6日の夕刻、群衆はユダヤ市庁舎に押し入り、ユダヤ文書室を荒らし、トーラの巻物を路上に投げ出して踏み躪った。プラハの街路は「ユダヤ人に対する陰険な脅迫の叫びで満たされ、群衆はユダヤ人の住居に侵入しようとした」⁽¹⁵⁵⁾。旧市街の街頭には3日間にわたって「エナメル靴をはいた暴徒たち」の抗議声明が響きわたった。「彼らはドイツ人の家には青白赤旗(チェコ共和国の国旗——訳者注)を立て、ドイツ系新聞の編集局を荒らし回り、ドイツ系学校や集会所では隠されていた皇帝の肖像画を探し出し、ドイツ語を話す通行人を殴りつけた。(……)そして〈新・旧教会〉の前では、ヘブライ語文書の小山が火刑に処せられて一日中燃えていた」⁽¹⁵⁶⁾。カフカはミレナに宛てて次のように書いている。

「このところ午後はずっと街を歩き、ユダヤ人に向けられた憎悪を総身で感じています。ユダヤ人が〈疥癬病みの人種〉と呼ばれるのも一度耳にしました。こんなに憎まれていたら、ここからは出て行くのが当然ではないでしょうか？(そのためにはシオニズムとか民族感情とかは全く必要ではありません)それでもなお踏み止まるのだ、というヒロイズムは、浴室から根絶やしにできないゴキブリの抱くヒロイズムでしかありません。たった今窓から眺めたところですが、騎馬巡査や銃に着剣した憲兵隊、叫びながら四散する群衆、そしてここにはそれらを窓から眺め下している私を顧みて、絶えず庇護されて生きているという厭わしい恥辱を味わったのでした」(カフカ『ミレナへの手紙』)

かつてヒルスナー事件で名を売ったプラハ市長カレル・バクサは、反ユダヤ・デモを「国家意識の正当な発露」⁽¹⁵⁷⁾と呼んだ。

1920年12月、カフカはスロヴァキア地方マトリアリのサナトリウムで過したが、こんな辺鄙な地にまで「国家意識」はカフカにつきまとった。それはある重病の、愛国主義者の娘の姿を取って出現した。「ハンガリー人、ドイツ人、ユダヤ人の中にあっても見棄てられていること、こう

した人々すべてを憎み、そして例えばあの娘のように特に病いが重いこと、これは容易ならざることです」(カフカ『オトラへの手紙』)。カフカはこの状況を徹底して味わった。

「彼女がその時、私にではなく、あの愛想のよい紳士に向かって行った発言に私はうっとりしました。彼女の最も好きな新聞は《ベンコフ》であり、しかもその社説ゆえに、というのです。彼女がどうにも取り繕いようのないようなことを何か言ったら、その時に初めて自分のことを打ち明けようと決心しました。そうすれば私は彼女から解放されるというわけです。しかし私の第一印象は(……)誇張されたものであったことが明らかになりました。彼女が気の毒な好人物であり、とても不幸で(……), 私が自分のことを打ち明けた後も、私を〈根絶〉したりせず、それどころか、彼女は私が彼女に親切にしたよりも、更にもっと私に親切にしてくれたのです」(カフカ『オトラへの手紙』)

マトリアリでのカフカの体験は、暫く後にチェコ社会全体が辿ることになる歩みを先取りしていたといえよう。1920年の終り頃には、状況はまだまだかなり危険な様相を呈していたが、1920年代の雰囲気は急速に変化した。一次大戦中にシオニストたちが危惧したような大規模なポグロムは発生しなかった。チェコ共和国はユダヤ人憎悪の戦場にはならなかった。この点ではチェコは、ハプスブルク帝国解体後に誕生した他のたいていの後継国家とは異なった道を歩んだ。そうなった主な理由は、マサリク政権が強化されるにつれ、経済的繁栄が始まったことにある。それにしても、チェコの戦前政界の良質の少数派が新国家建設の担い手となったことは、ユダヤ人にとっては思いもかけぬ僥幸だった。「今になってようやく国民は、若者を墮落させ、ユダヤ人とドイツ人に買収された冷淡な売国奴、有害な思想を撤き散らす者として誹謗された者たちの真価を、はっきりと悟った」⁽¹⁵⁸⁾というわけだ。しかしまた、新たに建設された国家の要人たちも、この新しい国の基盤がまだいかに脆弱であるか、それゆえ、新国家が有力な西欧諸国の世論の支援をいかに切実に必要としているかを熟知していた。新生チェコ共和国は西欧諸国に向かって、自らが東欧のスイスたらんとする意

向を表明していたのである。国粹主義的な「国家意識」の持主たちは、不快なユダヤ人たちに対する報復が起こらないことから、奇妙な満足感を引き出していた。「数百人のユダヤ人を撲殺することなど、やろうと思えば簡単なことだったろう！しかし我々がそうした一撃によって、我身を汚さなかったのはまことに立派なことだった」⁽¹⁵⁹⁾。チェコ民族社会主義党の党首クロファチは、彼の率いる反ユダヤ政党が鳴りを潜めている理由を大っぴらに説明するのを憚らなかった。「大戦中、多くのユダヤ人は大罪を犯した。大戦中、ユダヤ人がウィルソンのような連合国側の政治家の有力な相談相手であったことを忘れてはならない。この問題での彼らの傍若無人の振舞いは報復を呼び起こさずにはすまないだろう」⁽¹⁶⁰⁾。

チェコ共和国憲法は「ユダヤ人籍」を承認したが、このことによって遂にマサリクは多民族国家におけるユダヤ人問題の中和化に成功した。ただ単に政略上そうしたのではない。マサリク自身、以前からユダヤ民族主義運動には個人的に賛同していたのだ⁽¹⁶¹⁾。1918年から1920年にかけての反ユダヤ主義が吹き荒れた時代、約4000人のユダヤ人がチェコ共和国を出てパレスチナに向かった。それ以降、1939年のドイツ軍の侵攻までの期間には移住者はやっと6000人である。これはユダヤ人が、新国家に背を向ける理由がなかった証拠であろう。よく組織されていたチェコスロヴァキアのシオニズムは、チェコ語地域、特にメーレン地方に残っているドイツ語を使用するユダヤ人少数派を保護する楯の役割を果たした。1918年以降、シオニズムの指導者たちが「非オーストリア化」という政治的潮流に素早く適応したこともあって、このことはうまく成功した。一次大戦中も、親オーストリア的な言動は控えられていた。カフカの友人フーゴー・ベルクマンは、今や行動的シオニストとしてパリ平和協定に参加し、1919年3月、次のように語った。

「10月28日革命によって、同化政策の完全な破綻が露呈された。旧オーストリア政府が、ユダヤ人の忠誠心を利用して、他の少数民族を抑圧しようとしたのは周知の通りである。ベーメンとメーレンにおいてはユダヤ人は、ドイツとして扱われ、チェコ人との戦いに駆り出された。当然ながらその後、革命によって解放された少数民族はまずユダヤ人を攻撃

した。ユダヤ人は旧オーストリア精神の手先だと見做されたからである」⁽¹⁶³⁾

1921年の国勢調査では、チェコスロヴァキア在住ユダヤ人の57%がユダヤ人籍を申告している⁽¹⁶⁴⁾。とはいえ、むろんベーメンではその割合は、スロヴァキアやカルパチア地方のユダヤ人居住地で新たに付け加わった高い比率に比べれば、はるかに低い。というのはベーメンにおいては「ドイツ系ユダヤ人」と申告しても、間もなく政治的地位が保証されたからである。新生チェコ共和国は——これはマサリクの意図とは関りなく、結局のところ、ベーメンにおける単独支配をめざすチェコ・ブルジョア階級の権力装置であったが——不本意にも共和国に編入されたズデーデン・ドイツ人という国家にとっては危険な反抗分子の攻撃から、今や自らを防衛する立場にあった。ドイツ系ユダヤ人という政治的に無害な少数派に対する優遇措置は、多民族政策を実施する上で、効果的な宣伝材料として利用された。カフカ自身がその一例である。1918年以降、労働者災害保険局に就任したチェコ人所長の、カフカに対する好意的な態度の理由をカフカは上述した理由に、即ち「観閲式用ユダヤ人」としての彼の立場に帰している。「……むろんこの場合には政治的な理由も関係しています。というのは、彼はドイツ人たちに対しては、あなたがたの仲間の一人を特に優遇しましたよ、とすることができたからです。しかし本当のところは、その男はユダヤ人にすぎなかったのです！」（カフカ『書簡集』）

プラハのドイツ系ユダヤ人中産階級は、驚くべき機敏さで新しい社会情勢に適応した。1918年以前はチェコに対して敵対的な姿勢をとっていた『プラハ日報』は、1918年から19年の冬にかけては既に、チェコスロヴァキアという国家理念に賛同する立場へとはっきりと方向転換しつつあった。これは何ら不思議ではない。国土が二分されてしまえば、経済的観点からして堪大な損害が生ずることが予想されたからである。更に、新共和国は、戦勝国の陣営に属していたのに対し、ドイツはそうではなかったからである。「方向転換」が一次大戦後しばらくの間のユダヤ人経済界の合言葉だった。ヘルマン (Herrman)・カフカは、彼の名前の綴り中のrに、チェコ系ユダヤと称した彼の青年時代にはつけていたハチェク（文字の上の

「記号——訳者注」を再びつけ加えた。新しい、否、正確に言えば新しくかつ古いヘルマン (Heřmann)・カフカの使用する業務用書類に印刷された櫛の枝——その上にカフカ家の紋章のカラスが止まるのだが——は、民族的・意味論的な観点からは、以前のものと比べるとはるかに曖昧な植物に変化している⁽¹⁶⁶⁾。これはスラブ人好みの菩提樹の葉なのだろうか?^{訳注(三)}ともかくカフカの父は、いつも用心深く保ち続けてきたチェコ人との絆を再び誇示するようになる。彼や彼と同じ立場にある者たちの合言葉は、「われわれチェコ人は大丈夫」であった。これほど恵まれていない他の者たちも、これに劣らず器用に立ち回った。

「ユダヤ人がいかに臆面もなく、やっかいな状況を切り抜けたかを知るには、帝国互解以降、彼らの宣伝の仕方がどう変化したかを例に挙げるのがよからう。(……) アルベレス氏は革命が起こるまでは、両方の言語で、彼がある委託販売店の所有者であることを宣伝していた。しかし革命後は、決して彼の民族性をあからさまに示すことのないように、英語で控え目に〈代理店^{エージェンシー}〉と記したプレートを家に貼り付けた。(……) 抜け目なく立ち回った者の代表格はといえば例の喫茶店主だろう。この男は彼の店のクロークの上に “Garderob” なる中立的な言葉を記したプレートを掲げた。つまり、チェコ語の “Garderoba” か、それともドイツ語の “Garderobe” なのかはお客の判断に任せてしまい、自分はやっかいな語尾の問題からは手を引いたのである」⁽¹⁶⁷⁾

フランツ・カフカはそうした逞しい適応力の事例といえるあるプラハ・ユダヤ人に、1920年メラーンで出会っている。「この男は帝国互解までは(内緒の話しだが) ドイツ会館と市民クラブの両方の会員で(それぞれプラハのドイツ人とチェコ人の国粋主義的クラブで敵対関係にあり、前者はカジノと呼ばれた)、今ではどうやら強力なバックのおかげでカジノからの脱出に成功した。(抹削あり、解説は全く不可能) 息子はすぐにチェコの実業学校に転校させた、〈息子は今やドイツ語もできず、チェコ語もできないので吠えてでもいるよりしようがない〉。彼が選択したのはもちろん〈宗教信条に従って〉したわけだ。しかし、こうしたすべてが彼の性格を示すことには全然ならな

いし、彼の生活の核心にも全く触れていない。彼は善良で活発で機知に富む、熱狂することのできる老人です」(カフカ『書簡集』、文中の()内の小文字注は新潮社カフカ全集 9, P 303 の訳注を借用)。これはあの「自民族の店で」運動時代のユダヤ流プラグマティズムの焼き直しのようなものだった。しかし以前と全く同じようにはならなかった。つまり、青年チェコ党系の『国民新聞』は 1918 年以降、わが家の主となれた喜びに酔って、「打ち倒された敵が再び頭をもたげている……経済の分野でも。敵は、スラブ民族の三色旗を胸やショーウィンドに飾っただけでチェコ民族を欺しおおせたと思ひ込み、今や我々を経済的に支配しようとしている」⁽¹⁶⁸⁾ と怒りの声を挙げはしたものの、しかし 1920 年代に入ると間もなく、経済活動に占めるユダヤ人の役割を積極的に評価する機運も高まってきた。オーストリア帝国崩壊後に誕生した諸国との結びつきを最初に修復し、そうすることによって広大な旧オーストリア帝国経済圏のもつ利益を、新しい共和国のために確保したのもユダヤ系銀行や大商社の功績に他ならなかった⁽¹⁶⁹⁾。

チェコ共和国に目立った反ユダヤ主義が存在したとすれば、それはベーメン・ドイツ人特にズデーデン・ドイツ人の政治活動に限られていた。それを測る最も敏感な計測器となったのはプラハ・ドイツ大学の雰囲気だった。1922 年 11 月、プラハ・ドイツ大学学長にユダヤ人シュタインヘルツが選ばれたことに対して、ドイツ民族主義派の学生が抗議運動を起こした。この動きはその後間もなく、「入学者制限」をスローガンにした反ユダヤ主義学生運動となって中部ヨーロッパ全域に広まった。この運動の矛先は、チェコ共和国東部地方出身のユダヤ人学生数が急激に増加したことに向けられ、今日ではおなじみの学生反乱(講義室・研究室の占拠、講義ボイコット、パンフレット、壁新聞など)となって広まり、学生参加による「共同決定」(ユダヤ人講師の招聘を妨害するのが目的)を要求した。そしてこの運動を源として、間もなくまずオーストリアの、次いでドイツ、遂にはハンガリーやポーランドの大学にまで反ユダヤ主義の熱病が伝播して行った⁽¹⁷⁰⁾。各地ではほとんどの教授が学生に同調した。プラハでは医学部長が、「大学はドイツ・アーリア的精神によって導かれるべきであり、非アーリア人はすべて単なる客にすぎず、客は客としての立場を忘れてはならない」と主張した。しかし、世紀転換期頃のオーストリアの場合とは異って、

今や態勢を整えてきた新国家は、法治国家としての権威が掘り崩されるのを黙認するようなことはしなかった。一週間にわたる大学紛争の後、反ユダヤ主義学生は譲歩せざるをえなかった。チェコスロヴァキア共和国政府が、ドイツ大学の自治に介入すると圧力をかけたからである。それは反乱者たちにとっては大学の「ユダヤ化」よりも更に不愉快なことだった。「ドイツ文化の擁護」を叫ぶプラハの運動は、次のような悪意のこもった声明を出して終熄した。

「我々の行動によって、多分ユダヤの黒幕たちはこの先10年間は、ドイツ大学の頂点に、ドイツ人の敵を据えるなどという不埒な考えを抱く氣力を失ったことであろう。我々のこれまでの闘争の最大の成果といえるものはおそらく、我々のうちの最も無関心だった者も、ユダヤ人の危険性について余す所なく理解するに至ったこと、そして、ドイツの血が流れている人間にとって、問題の解決手段はただひとつしかないという確信を得たことだろう。それは即ち、うさん臭い神の選民たちが、わが民族を縛りつけている鉄鎖を打ち砕くこと、これである」

1920年、カフカはヤノーホにむかって「プラハにやって来るドイツ人学生たち、彼らは侵入してくる権力の、敵たちの斥候に他なりません」(『ヤノーホとの対話』)と語っている。彼らは「ドイツ民族社会主義労働者党」の主張を信奉していた。この党は、かつての民族主義的な労働者団体を母胎としていたが、1918年以降は上昇氣流に乗り、若い世代に人気のある政党になっていた。この党のイデオログ、ルドルフ・ユングは1919年『民族社会主義』を刊行したが、この書はユダヤ人問題へのアプローチという点で、ヒトラーの『わが闘争』の陰險な論調を先取りしている。そしてドイツ系ベーメンの民族社会主義者たちは、ミュンヘンから響いてくる獅子吼に感激して、次のように記録していた。「間もなくわかったことだが、あのミュンヘンにいる男は、議論はあまりやらないし、ましてや物を書いたりもしないのだ。しかし、彼の迫力ある赤色のプラカードは町角の至る所に掲げられているし、彼の催す集会は超満員になるということだ。そうした集会では妥協の仕方が教えられるのではなく、ドイツの刷新をめざす過

激な十字軍が主張されているという。(……) ミュンヘンでは我々の立場は理解された」⁽¹⁷¹⁾。1920年8月、ベーメンの民族社会主義労働者党の代表者たちはザルツブルクでヒトラーに初めて会見している。

1923年9月、カフカはドーラのいるベルリンに赴いた。カフカは平穏になったベーメンを去り（暫くあとでマサリクは、「諸民族が共存するのに、必ずしも愛し合う必要はない」という鶴の一声でもって、ユダヤ人問題に関する不愉快な議論に決着をつけた）、不穏なドイツに移住したのだ。1923年秋、ドイツ全土に激しいユダヤ人憎悪の嵐が吹き荒れた。11月初頭、ドイツ帝国の首都ベルリンに、ベルリン史上はじめてのポグロムが起こり、「ユダヤ人と見做された」人々が街頭で追いかけられ、暴力を加えられ、殺害された。カフカの友人で当時ベルリンにいたロベルト・ヴェルチは、『ユダヤ展望』で次のように書いた。「ベルリンの街頭でユダヤ人虐待が行なわれた。ユダヤ人の姿をつけ狙う憎悪に歪んだ顔、ユダヤ人を虐待する時の喜々とした一致団結ぶり、ユダヤ人に加えられる下劣な蛮行、そしてこれに対する国民各層の同意。こうした事態は、我々ユダヤ人が現在、法律的な保護をほとんど失ったことを示している」。

ヒトラーのミュンヘン一揆（1923年11月8～9日——訳者注）の2日前、ドイツ労働組合は組合員に対して次のように呼びかけた。

「ベルリン・ユダヤ地区における大規模な暴動は、ドイツ民族派の煽動者たちの念入りな、かつ冷徹な計算に基づいて準備されたものであり、ドイツの脆弱な政治的基盤を破局にまで導き、大衆をファシズムの陰險な目的のために動員することを狙っている。ドイツ民族主義の領袖たちは、単にユダヤ人迫害を煽動しているだけではない。彼らは同時にこうした蛮行を、右翼の独裁者だけがドイツ市民にまだ辛うじて平和を保証することができる、という彼らの主張の証拠として利用しようとしているのだ」

カフカはベルリンからベーメンに向けて書いている。

「当時、僕が出発していなかったとすれば、今は決して出発しないでしょ

う。そうです、そもそも僕は出発したのだろうか？僕はどんなに新聞の見出しを前に戦慄したことか、そして今もなお、ほとんど来る日も来る日も戦慄しているのです。(……) しかもその場合、すべては一般的には文字通り真実でありながら、しかし特殊な場合には真実ではなく、その点が問題なのです。』(カフカ『オトラへの手紙』)

原注

第3章

- (81) K. Krolop: Zu den Erinnerungen Anna Lichtensteins an Franz Kafka. *Philologica Pragensia* 5 (1968), S. 21ff.
- (82) M. Brod: *Der Prager Kreis*. Stuttgart 1966, S. 204
- (83) Fischer: *Dienstboten*, S. 73
- (84) A. Fuchs: *Ein Sohn aus gutem Hause*. London 1943, S. 7f
- (85) *Selbstwehr* 18. 11. 1910
- (86) Brod: *Über Kafka*, S. 74
- (87) 同書
- (88) *Selbstwehr* 29. 10. 1909
- (89) *Österreichische Wochenschrift* 1910, S. 139
- (90) *Selbstwehr* 17. 1. 1908
- (91) *Selbstwehr* 22. 7. 1910
- (92) H. Tietze: *Die Juden Wiens*. Leipzig 1933, S. 232
- (93) *Selbstwehr* 1907 ff
- (94) *Ostdeutsche Rundschau* 31. 3, 1911
- (95) O. Weber: *Der Friede in Böhmen*. *Deutsche Arbeit* 10 (1910/11), S. 10f
- (96) *Selbstwehr* 17. 1. 1908, H. Tietze; *Die Juden Wiens* S. 232
- (97) *Ostdeutsche Rundschau* 20. 2. 1901
- (98) *Selbstwehr* 10. 4. 1908
- (99) *Israelitische Gemeindezeitung* 1901, S. 133
- (100) P. G. J. Pulzer: *The Austrian Liberals and the Jewish Question, 1867—1914*. *Journal of Central European Affairs* 23 (1963), S. 131ff
- (101) *Selbstwehr* 9. 12. 1910
- (102) *Selbstwehr* 12. 9. 1912
- (103) Wiskemann: *Czechs and Germans*, S. 59
- (104) V. Dolejší: *Noviny a novináři* (新聞と新聞人) Prag 1963, S. 67ff.
Šafařík: *K vzniku*, S. 39
- (105) *Selbstwehr*

- (106) 同書 5. 5. 1911
- (107) Fuchs: Sohn, S. 10
- (108) G. Kisch: Alexandr Kisch. 1848—1917. Halle 1934, S. 26
- (109) Selbstwehr 9. 8. 1912—Österreichische Wochenschrift 29 (1912), S. 25
- (110) R. Musil: Der Mann ohne Eigenschaften. Hamburg 1970, S. 204
- (111) Jahresbericht der Österreichisch-Israelitischen Union Die Neuzeit 1903, S. 205f
- (112) M. Brod: Die Tschechen und der jüdische Künstler. Selbstwehr 12. 7. 1918
- (113) Selbstwehr 14. 6. 1912—28. 6. 1912
- (114) Selbstwehr 26. 5. 1911
- (115) K. Berchtold (Hrsg.): Österreichische Parteiprogramme 1868—1966. Wien 1967, S. 178
- (116) Zitiert bei M. Glettner: Die Wien um 1900. München-Wien, 1972, S. 325
- (117) Detierung von Kafkas politischer Aktivität bei Bezzel: Kafka-Chronik
- (118) Binder: Selbstwehr 参照
- (119) Selbstwehr 10. 4. 1908
- (120) 同書 20. 1. 1911
- (121) Musil: Der Mann ohne Eigenschaften, S. 34
- (122) Israelitische Gemeindezeitung 1901, S. 166
- (123) SUA PP 1908—1915; V/15/61
- (124) Selbstwehr 16. 12. 1908, Wiskemann: Czechs and Germans, S. 68
- (125) O. G. Blanický: O antisemitismu v českém národě (チェコ国民の反ユダヤ主義について) Prag. 1930, S. 179
- (126) E. Rychnovsky: Massaryk. Prag. 1930, S. 179 参照
- (127) Šafařík: K vzniku, S. 39
- (128) B. Nuška: Švíhová aféra a Kavkuv proces (シュヴィハ事件とカフカの『訴訟』) Liberec 1969
- (129) M. Frühling: Biographisches Handbuch der in der k. k. österr. ung. Armee und Kriegsmarine aktiv gedienten Offiziere, Ärzte, Truppenrechnungsführer und sonstigen Militärbeamten jüdischen Stammes. Wien 1911
- (130) Schicksalsjahre Österreichs 1908—1919. Das politische Tagebuch Josef Redlichs. Bd.1. Graz-Köln 1953, S. 239
- (131) E. Pernerstorfer: Zur Judenfrage. Der Jude I (1916—17), S. 315—

1990. 9 C. シュテルツル『カフカの邪悪なベーメン』(3) (伊藤) 361 (361)
- Kriegsartikel der Arbeiterzeitung abgedruckt in J. Braunthal: Austerlitz spricht. Wien 1931
- (132) J. Herben: Kniha rzpominek (回想録). Prag 1936, S. 457
- (133) Brandeis' Kalender 1916/17, S. 220
- (134) A. York-Steiner: Die Kunst, als Jude zu leben. より引用。Leipzig 1928, S. 520
- (135) Selbstwehr 17. 4. 1916
- (136) 同書
- (137) Stölzl: Burg 89
- (138) Munin (カール・イロの筆名): Österreich nach dem Kriege. Forderungen eines aktiven österreichischen Politikers. Jena 1915, S. 25
- (139) M. Brod: Im Kampf um das Judentum. Wien 1920, S. 10f.
- (140) Selbstwehr 24. 11. 1916
- (141) 同書 1. 12. 1925; 25. 5. 1934
- (142) 同書 16. 8. 1918
- (143) Bezzel: Kafka-Chronik, S. 136f.
- (144) Selbstwehr 8. 3. 1918—F. C. Weiskopf: Das Slawenlied. も参照せよ。Berlin 1951, S. 105ff
- (145) Blanický: O antisemitismus, S. 19
- (146) Stölzl: Burg, S. 93 より引用
- (147) Blanický: O antisemitismus S. 188
- (148) Selbstwehr 1919 の各所
- (149) 同書 6. 12. 1918
- (150) 同書
- (151) 同書 5. 9. 1919
- (152) Selbstwehr 15. 10. 1920 より引用
- (153) Venkov (土地) 26. 9. 1920
- (154) Selbstwehr 22. 10. 1920 より引用
- (155) 同書 19. 11. 1920/26. 11. 1920
- (156) Weiskopf: Das Slawenlied, S. 267
- (157) Národní listy (国民新聞) 19. 11. 1920
- (158) Herben: Kniha vzpomínek, S. 662
- (159) Večer 12. 11. 1918
- (160) 同紙 25. 10. 1918
- (161) 詳細は Stölzl: Burg 102 ff
- (162) The Jews of Czechoslovakia II, New York 1971, S. 590
- (163) Selbstwehr 26. 3. 1919
- (164) Handbuch der Geschichte der Böhmisches Länder IV, Stuttgart

1969, S. 39

(165) 同書 S. 205, F. Prinz

(166) Wagenbach: Selbstzeugnisse, S. 17

(167) J. Münzer: Neviditelné ghetto (見えざるゲットー). Přítomnost 3 (1926), S. 698

(168) Národní listy 10. 12. 1918

(169) Pick in: The Jews of Czechoslovakia I, S. 361

(170) Jüdische Rundschau 27 (1922), S. 608ff, 619. 641 Selbstwehr 1922, 11月号の各所.

(171) Krebs: Kampf in Böhmen, S. 137

(172) Stölzl: Burg 99 より引用

(173) Jüdische Rundschau 28 (1923), S. 557ff. Selbstwehr 9. 12. 1923 も参照.

訳注

- (一) 既に 1880 年にターフェ首相が、行政・教育の上でチェコ語とドイツ語に同等の権利を認める言語令を發布しているが、1897 年 4 月、帝国首相バデーニは新言語令を發布。これは行政事務の上でドイツ語とチェコ語の完全平等を実現しようとしたもので、ベーメンとメーレンのすべての官吏は二つの言語の知識を持つべきことを定めていた。しかしこの言語令は、ふだんからドイツ語を学習していたチェコ人には有利であり、一方、チェコ語を学習することの少なかったドイツ人には不利に作用し、その結果、チェコ人が官吏を独占する可能性も含んでいたために、ドイツ人の間に猛烈な反対運動が起こり、オーストリア全土に騒乱が広まった。こうした状況の中で 11 月、皇帝はバデーニ解任に踏み切り、1899 年秋、この言語令も撤回された。
- (二) オーストリア帝国は 1867 年、ハンガリーの独立要求に押されて、ハンガリー的大幅な自治を認める Ausgleich を締結していたが、帝国内のもうひとつの有力民族であるチェコ人も、ハンガリーの先例にならってオーストリアとの Ausgleich を要求し続けた。既に 1871 年、F・ヨーゼフ帝はいったんはこの要求を認めたが、宮廷内の反対や、既に帝国内で有利な立場を獲得したハンガリーの反対にあって、1ヶ月もたたないうちに再びこの承認を撤回している。
- (三) 櫛の木は森の民ゲルマン民族が最も崇拝した本である。ヘルマンはドイツを象徴する櫛の木にカラス（チェコ語の kavka はカラス）をとまらせることによって、自分のドイツ性をアピールしようとした。ヘルマンは 1906 年までは、はっきりと櫛とわかる商標を用いているが、それ以降は何の木かははっきりしない木に変えた。K. Wagenbach: Franz Kafka, Bilder aus seinem Leben (Wagenbach) S. 36 には、この商標が対照されて載っている。